《資料》

同志社大学文化情報学部蔵『源氏物語色紙画帖』の紹介

―影印、翻字と考察―

福田智子

同志社大学文化情報学部蔵『源氏物語色紙画帖』（請求記号：721.2‖G 9216、資料番号：166700140）（以下、［文情本］と略す。）は、『思文閣古書資料目録』第二百四十七号（平成二十八年五月）六〇頁に掲載されていた一冊の折本である。縦二八・五センチ、横二四・六センチで、木箱（縦三二・四センチ、横二八・〇㎝、高さ九・四センチ）入り。蓋表には「御繪鏡」、蓋裏には貼紙で「己肆（印）　第四項　拾壱番　源氏之繪　烏丸光廣卿　其外□（欠損）　明治二十年（印）」と記されている。先の目録では、伝烏丸光広他筆、江戸前期写とされる。

表紙は鳥ノ子地に牡丹唐草緞子で、表紙裏には金箔が施され、流水に紅葉の情景が描かれる。また、見返しの図柄は、秋の七草である。

画像1　木箱

画像2　蓋表

画像3　蓋裏

画像4　表表紙

画像5　裏表紙

画像6　表表紙裏と見返し

画像7　裏表紙裏と見返し

本書の内容は、『源氏物語』の色紙二十四枚である。すなわち、絵は、紙本金泥極彩色画十二図、詞書（本文）は、色替金銀箔散金泥下絵入料紙十二枚である。桐壺・若紫・紅葉賀・花宴・明石・蓬生・絵合・初音・若菜下・夕霧・橋姫・早蕨の計十二帖が、『源氏物語』の巻序に沿って並べられている。本稿は、これらの詞書と絵について、『源氏物語』の他本および源氏絵と比較検討しながら、本書を紹介、考察するものである。

凡例

一、影印は、紙面の都合により、適宜、配置する。

一、各帖の冒頭に、『源氏物語』における巻序と名称を示す。

一、次に、［文情本］詞書の『源氏物語』に該当する箇所を示す。角川古典大観『源氏物語』CD-ROM に拠り、その箇所を含む節の小見出しを挙げるとともに、同 CD-ROM の「参考情報」機能を用いて、以下の校訂本文の該当巻数–頁数を列挙する。

・日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店）　略称［大系］

・新日本古典文学大系『源氏物語』（岩波書店）　略称［新大系］

・日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）　略称［全集］

・新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）　略称［新全集］

・新潮日本古典集成『源氏物語』（新潮社）　略称［集成］

・角川文庫『源氏物語』（角川書店）　略称［文庫］

・玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店）　略称［評釈］

なお、小見出しは、必ずしも［文情本］の詞書を過不足なく説明するものではない。

一、【翻字】では、漢字・仮名ともに通行の字体を用いるが、できる限り本書の原態を尊重する。

1、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。

2、濁点や句読点は付さない。

3、改行箇所には「／」を付す。

4、判読できない文字は「□」とし、右傍らに（　）付きで予想される文字を示す。

一、校異は、表記の相違は示さず、語の異なりのみを示す。

【校異1】では、まず、北村季吟『湖月抄』（延宝三年〈一六七五〉刊）本文と比較する。『湖月抄』のテキストは、『源氏物語湖月抄増注』上・中・下（北村季吟著・有川武彦校訂、講談社学術文庫314・315・316、一九八二年五月）に拠り、該当箇所を、上（あるいは中・下）-頁-行（本文の行数）と記す。また、異同箇所は「画帖詞書↔湖月抄本文」の順に示す。

【校異2】では、さらに『源氏物語大成』（中央公論社、一九八九年八月普及版再版。略称「大成」）に拠り、本文異同を示す。［文情本］の該当箇所を、巻数-頁（底本の名称）で示した上で、［文情本］と「大成」底本との異同箇所を、「画帖詞書↔大成底本本文」の順に示す。［文情本］詞書と一致する伝本がある場合には、「＝」を用いて、その伝本の名称を本文系統の略号とともに記す。

・青表紙本系統〈青〉　・河内本系統〈河〉

・別本〈別〉

なお、一致する部分と一致しない部分とが混在する箇所を引用する場合には、「⅄」を用いて示す。

最後に、［文情本］と全文が一致する伝本を、系統の略号とともに※を付して挙げる。

一、【図柄】では、［文情本］が江戸前期写と推定されることから、まず京都国立博物館所蔵、土佐光吉画、後陽成天皇他書『源氏物語画帖』（勉誠社、平成九年四月。略称［京博本］。）と比較検討する。狩野博幸「京博本「源氏物語画帖」の画家について」（同書一一七・一一八頁）に拠れば、制作年代の下限は、光吉画の三十五図と無記名の十三図は慶長十八年（一六一三）、長次郎銘の六図でもその翌年とされる。

また、適宜、『豪華［源氏絵］の世界　源氏物語』（秋山虔・田口榮一監修、株式会社学習研究社、一九九七年四月。略称『源氏絵の世界』。）掲載図版および「源氏絵帖別場面一覧」（二九〇～三〇一頁）を参看し、図版番号もこれに拠る。本稿で取り上げた作品のうち、略称を用いるのは次の二本である。

・伝土佐光則筆源氏物語色紙貼付屏風（江戸時代初期、個人

蔵）　　略称［伝光則］

・土佐派源氏物語色紙絵（江戸時代初期、堺市博物館蔵）

略称［堺博本］

なお、適宜、［文情本］詞書の下絵にも触れる。

一、【備考】では、帖ごとに、［文情本］の詞書と絵について、考察の要点をまとめる。

なお、本項における説明の必要上、［文情本］詞書にない『源氏物語』本文を引用する場合は、『新編日本古典文学全集』に拠り、その巻数と頁数とともに示す。傍線筆者。

一、【考察】では、最後に［文情本］全体を通したまとめとする。

第一帖　桐壺

［21］高麗の相人による若宮の観相もあって、帝は源氏にすることを決意

［大系］1-44、［新大系］1-20、［全集］1-116、［新全集］1-39、［集成］1-31、［文庫］1-41、［評釈］1-115

【翻字】

相人をとろきて／あまたゝひかたふき／あやしむ帝王／のかみなき位にの／ほるへき人の

【校異1】［湖月抄］上-35-5　○帝王の↓くにのおやと成りて

帝王の　○人の↓相おはします人の

【校異2】［大成］1–20（底本：池田本　伝二條為明筆）　○帝王の↓くにのおやとなりて帝王の　○人の↓さうおはします人の　※全文一致本文：なし

【図柄】

「桐壺の代表的場面。さまざまなヴァリエーションはあるがほとんど同一の図様が踏襲された」（『源氏絵の世界』三〇頁）という図柄である。［京博本］（光吉画）にもある。

なお、館外の車の側にいる人物は、［京博本］では三人が向き合っているが、［文情本］では二人であり、いずれも館の方を向いている。また、高麗の相人の位置も、［京博本］では右大弁と同じ床であるが、［文情本］では一段下がった位置に見え、碁盤目の床は濃淡の青色で塗り分けられている。さらに、高麗の相人の背後には、前栽に紅梅のような赤い花の咲く木が枝を伸ばすが、［京博本］にはない。初春の情景をイメージしたものか。

【備考】

詞書には欠落と見られる箇所が二箇所あるが、同様の本文は「大成」にも見出せない独自異文である。［文情本］は、より簡便な本文になっているが、絵の説明としての文意は伝わるであろう。

第五帖　若紫

［2］なにがし僧都の僧房の様子

［大系］1−178、［新大系］1−153、［全集］1−275、［新全集］1−201、［集成］1−184、［文庫］1−152、［評釈］2−32

【翻字】

おなし小柴なれ／とうるはしうしわた／してきよけなる／屋らうなとつゝけ／て木たちよしある／はなに人のすむにかと

【校異1】［湖月抄］上−238−8　○よしある↓いとよしある

【校異2】［大成］1−152（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　○よしある↓いとよしある　※全文一致本文：なし

【図柄】

「源氏絵を代表する最も有名な場面」（『源氏絵の世界』四四頁）と目される図柄である。［京博本］では光吉と長次郎の二枚の画がある。満開の桜の中、僧坊内の女性たちを、従者を伴った光源氏が小柴垣のもとで垣間見るという絵としては、［文情本］は［京博本］と共通するが、左右反転の構図になっている。また、［京博本］には僧坊の奥に脇息にもたれ掛かった尼君が描かれるが、［文情本］にはない。

【備考】

詞書は、「雀の子を犬君が逃がしつる」という文言や、美しい少女（後の紫上）の容姿の描写ではなく、光源氏が北山の僧都の房で少女を見初める契機となる状況説明を引用している。また、詞書は「いと」を欠くが、「大成」にも他例はない。

なお、絵の上方に描かれる桜は、「三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、……」（新全集1巻199・200頁）に依拠するものであろう。

第七帖　紅葉賀

［1］朱雀院行幸の試楽で、源氏は青海波を舞い、人々はその美しさに感嘆の思い

［大系］1−272、［新大系］1−240、［全集］1−383、［新全集］1−311、［集成］2−11、［文庫］2−49、［評釈］2−251

【翻字】

頭中将よういかたち／人よりはことなるを／立ならひては花の／かたはらのみ山木也／入かたの日影さやかに／さしたるに楽の声なと

【校異1】［湖月抄］上−364−5　○よういかたち↓かたちよういい　○人よりは↓人には　○楽の声など↓がくの聲

【校異2】［大成］1−237（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　○よういかたち↓かたちよういい　○人よりは↓人には　○立ならひては＝〈青〉三條西家本〈河〉七毫源氏↓たちならひてはなを

○楽の声など↕がくの聲　※全文一致本文：なし

【図柄】

［京博本］には該当する絵はない。［伝光則］31には、光源氏と頭中将の舞姿と簀子縁に座る貴族たちの絵があり、階や雅楽太鼓を描く点でも［文情本］と共通するが、舞人二人が向き合う［文情本］に対し、［伝光則］は、舞人をはじめ描かれたすべての人物が向かって左を向く。

なお、［伝光則］には下人が描かれるが、「土佐派源氏絵にしばしばみられ」るという（『源氏絵の世界』五四頁）。ただし、［文情本］に下人は描かれていない。

【備考】

詞書は、舞の様子ではなく、優れた光源氏の姿を頭中将との比較で述べる部分である。本帖でも独自異文が目立つが、「なを」を欠く本文は、「湖月抄」をはじめとして複数の伝本に見受けられる。

なお、［文情本］の絵の右端には菊が描かれ、また、詞書の色紙の方にも、秋の七草の下絵の上に菊が描かれる。これらは、「かざしの紅葉いたう散りすぎて、顔のにほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて左大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひえ

ならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる入綾のほど、そぞろ寒くこの世のこととともおぼえず。」（新全集1巻315頁）という物語本文に拠ったのであろう。

第八帖　花宴

［5］源氏は、良清・惟光に女の身もとを調べさせるとともに、取り交わした扇に歌を書きつける

［大系］1-309、［新大系］1-279、［全集］1-430、［新全集］1-360、［集成］2-56、［文庫］2-82、［評釈］2-345

【翻字】

かのしるしのあふき／はさくらの三重かさね／にてこきかたにかすめる／月をかきて水にうつ／したる心はえめなれ／たれとゆへなつかしう／もてならしたり

【校異1】［湖月抄］上-417-5　異同なし

【校異2】［大成］1-274（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）○さくらの三重かさね＝〈青〉横山本・伝耕雲花山院長親筆本・肖柏本・三條西家本・池田本（「のみへ」補入）、〈河〉全本（高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本）、〈別〉全本（御物本）↕さくらかさね　○めなれたれと＝〈青〉横山本・池田本・伝耕雲花山院長親筆本・肖柏本・三條西家本・陽明家本（「たるれ」の「る」見セ消チ）、〈別〉全本（御物本）↕めなれたる事

なれと（「たる事なれ」補入）　※全文一致本文：〈青〉横山本・池田本・伝耕雲花山院長親筆本・三條西家本

【図柄】

［文情本］とほぼ同様の場面を描いたと想定される絵は［京博本］（光吉画）にもある。弘徽殿の細殿の構図や画面上部の月、朧月夜の右手の扇は共通しているが、月を眺める朧月夜を光源氏が画面角から眺めている［京博本］に対し、［文情本］はふたりが向かい合い、光源氏は朧月夜の手を取らんばかりである。［文情本］と［京博本］との間には、物語の場面にわずかながら時間差が認められる。

なお、［京博本］と同じ図柄は「源氏物語扇面屏風」（室町時代末期、個人蔵）にも見え、「土佐光吉の色紙などでいっそうの洗練が加えられて、繰り返し描かれつづけた」（『源氏絵の世界』五八頁）と指摘されている。

【備考】

絵は、「おぼろ月夜ににるものぞなき」という文言に象徴される、光源氏と朧月夜の出逢いの場面である。だが、詞書は、この夜の女性の素性を調べる手掛かりである「しるしの扇」の描写になっている。詞書と絵との間には時間の経過としては乖離が見られるが、絵には、朧月夜の手にはっきりと扇が描かれている。

なお、［文情本］（「湖月抄」も同じ）との対立本文「さくらかさね」は、「大成」底本の大島本の他、〈青〉陽明家本にも見られる。また、「めなれたる事なれと」も、〈河〉全本（高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本）が、この本文を有する。本帖では、詞書は「湖月抄」と一致し、独自異文は見られない。

十三　明石

［17］八月十三日の夜、入道の誘いにより、源氏は岡辺の女の宿を訪れる

［大系］2-82、［新大系］2-76、［全集］2-245、［新全集］2-255、［集成］2-289、［文庫］3-87、［評釈］3-216

【翻字】

やかて馬／引むけて／をもむきぬへく／おほえて／秋の夜／の／月毛／の／こま／よ／わかこふる／雲井に／かけれ／時の間も／みむ

【校異1】［湖月抄］上-667-12　○引むけて↔ひきすぎて　○おほえて↔おぼす

【校異2】［大成］2-464（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　○引むけて↔ひきすきて　○おほえて↔おほす　○雲井に＝〈青〉肖柏本↔雲ゐを　※全文一致本文：なし

【図柄】

［京博本］には該当する絵はないが、［堺博本］54には、画面下半分に馬に乗った光源氏と四人の従者、画面左上に岡辺の宿を描くという構図の絵があり、［文情本］と共通する。「浄土寺扇面の作例をはじめとしてしばしば選択された名場面」（『源氏絵の世界』七四頁）とされる。なお、月が描かれる位置は、［文情本］は画面右上、［堺博本］は左上で異なっている。

【備考】

詞書は、本帖では独自異文が目立つが、「馬引むけて」という本文は、あるいは絵に描かれた首を曲げた馬の図柄に引かれたか。ちなみに、［堺博本］では、馬の首は前を向いている。また、「雲井に」という本文は、「大成」では〈青〉肖柏本のみに見え、他本はすべて「雲ゐを」である。

なお、詞書の色紙の下絵に描かれた干し網は、明石の浦を示すものであろう。ひいては、明石入道の隠遁思想の象徴とも見做されようか。干し網が厭世観を暗示する可能性については、詳しくは、岩坪健「同志社大学所蔵『源氏物語色紙』の紹介」（『社会科学』第五〇巻第四号、二〇二一年二月）三三頁下段を参照されたい。

第十五帖　蓬生

［12］末摘花が変わらずいることを知り、惟光の手引きで源氏

は邸内に入る

［大系］2-155、［新大系］2-149、［全集］2-338、［新全集］2-348、［集成］3-76、［文庫］3-151、［評釈］3-422

【翻字】

御さきの露を／馬のむちしてはらひ／つゝ入奉る雨そ／そきも猶秋の／時雨めきて

【校異1】［湖月抄］中-73-12　異同なし

【校異2】［大成］2-536（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　異同なし　※全文一致本文：〈青〉大島本・横山本・肖柏本

【図柄】

［京博本］（光吉画）にもある図柄である。画面右下方に、光源氏と従者が二人描かれる。そのうち一人の従者は、［文情本］では鞭を持っているが、［京博本］では判然としない。また、もう一人の従者は、［文情本］［京博本］ともに、端折傘を源氏に差し掛けている。この傘と鞭は、つとに「国宝源氏物語絵巻」（平安時代末期、徳川美術館蔵）にも描かれるところである。画面左上には末摘花の邸がある。

なお、［京博本］には藤が掛かった松が大きく描かれるが、［文情本］にはない。一方、［文情本］詞書の色紙の下絵には、柳が描かれている。

【備考】

「大成」所収本文では、「むち」を「ふち」とする伝本（〈青〉御物本・為家本・榊原家本・池田本・三條西家本、〈別〉陽明家本）もあるが、［文情本］では、「湖月抄」をはじめ、〈青〉の全文一致本文三本や、〈河〉すべて（七毫源氏他四本）とともに「むち」本文を有している。

傘を差し掛ける従者の絵は、［文情本］詞書に続く「……うちそそけば、『御かささぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて』と聞こゆ。」（新全集2巻348・349頁）という本文に拠って描かれたものである。

また、［京博本］の藤が掛かった大きな松の木は、「大きなる松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。」（新全集2巻344頁）に拠る一方、［文情本］の詞書の色紙の下絵は、この本文に続く、「橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。」（同）という物語中の景物に着目している。

第十七帖　絵合

［9］中宮の御前での物語絵合、左右それぞれ竹取、宇津保物語などを提出

［大系］2-180、［新大系］2-177、［全集］2-372、［新全集］2-382、［集成］3-105、［文庫］3-171、［評釈］4-43

【翻字】

伊勢の海の／ふかき心を／たとらすて／ふりにし／あとゝ／波や／けつへき

【校異1】［湖月抄］中-105-1　異同なし

【校異2】［大成］2-566（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　異同なし　※全文一致本文：〈青〉全本（御物本・大島本・横山本・榊原家本・陽明家本・池田本・肖柏本・三條西家本）、〈河〉七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・大島本

【図柄】

［京博本］（光吉画）にもある図柄である。［文情本］は、邸内の構図や室礼、人物の配置から顔の向き、庭の桜の木に至るまで［京博本］に酷似している。「光吉が、京博本や、久保惣本の横長判画帖に描いた図様が周辺の土佐派の画家たちによって踏襲され」た（『源氏絵の世界』八六頁）とされる図柄で、［堺博本］69にもこれに類する絵がある。

【備考】

詞書は、『伊勢物語』と『正三位』との物語絵合の左方、平内侍の和歌である。物語の中で詠まれた数ある歌の中から、『伊勢物語』を弁護するこの和歌が撰び取られたことになる。絵は土佐派の図柄を完全に踏襲する一方、この和歌に詠まれる「伊勢の海」の情景は、詞書の色紙の下絵に州浜を描くことによって表現しようとしたものか。

第二十三帖　初音

［4］姫君のもとを訪れると明石の君から歌、源氏は返歌をさせる

［大系］2-380、［新大系］2-380、［全集］3-140、［新全集］3-146、［集成］4-14、［文庫］4-157、［評釈］5-163

【翻字】

引わかれ年は／ふれとも鶯の／すたちし松の／□□□（ねをわ）すれめや／おさなき□（御）心にま／かせてくた〳〵しく／そある

【校異1】［湖月抄］中-360-4　○ある↓あめる

【校異2】［大成］3-765（底本：池田本　伝二條為明筆）　異同なし　※全文一致本文：〈青〉全本（池田本・伝慈鎮筆本・横山本・肖柏本・三條西家本）

【図柄】

［京博本］（光吉画）にもある図柄である。ただし、［京博本］には、庭の築山で子の日の小松引きをする女童が描かれていない。その点も含めて、［文情本］により近似するのは［伝光則］89である。もっとも、［伝光則］には、［文情本］には描かれな

い庭の白梅や、松にとまった鶯以外の明石の君からの贈り物も描かれるが、絵の構図や室礼、人物の配置や顔の向きは、ほぼ共通している。

【備考】

詞書は、紙面の擦れによるものか、判読しにくい文字が多いが、「ある」（文情本）と「あめる」（湖月抄）との対立は、「大成」に拠れば、〈青〉全本と、〈河〉全本（御物本・大島本・飯島本・高松宮家本・尾州家本・蓬莱寺本）、〈別〉全本（大島本・保坂本・麦生本・阿里莫本）との対立としても捉え得る。

小松引きをする女童の様子は、［文情本］詞書に引用された和歌の前に、「姫君の御方に渡りたまへれば、童、下仕など御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。」（新全集3巻145頁）とある本文に拠る。物語は、「北の殿よりわざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も思ふ心あらんかし。」（同）と続くが、［文情本］は「北の殿」（明石の君の御殿）からの贈り物のうち、「五葉の枝にうつる鶯」のみを描いている。詞書にある明石の姫君の和歌に詠まれた「鶯の巣立ちし松」との対応を重視したためか。

第三十五帖　若菜下

［4］柏木は春宮に女三の宮の猫のかわいらしさを述べ、手に入れたところで柏木が預かり取る

［大系］3-320、［新大系］3-313、［全集］4-149、［新全集］4-157、［集成］5-143、［文庫］6-113、［評釈］7-273

【翻字】

ねこともあまたつ／とひ侍にけりいつら／この見し人はと／たつぬいとらうたく／おほえてかきなてゝ／ゐ給へり

【校異1】［湖月抄］中-821-5　○ねことも↕御ねこども　○見し人は↕みし人か　○たつぬ↕尋ねてみつけ給へり　○かきなてゝ↕かきなでつつ　○ゐ給へり↕ゐたり

【校異2】［大成］4-1128（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　○ねことも＝〈河〉全本（御物本・七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・平瀬本・大島本・鳳来寺本・国冬本）、〈別〉保坂本↕御ねことも　○たつぬ↕たつねてみつけ給へり　○ゐ給へり↕ゐたり　※全文一致本文：なし

【図柄】

女三の宮の猫を膝の上に載せた柏木が、二人の女房の前に座っている絵である。［京博本］（光吉画）にも柏木が猫を抱く絵はあるが、褥（しとね）の上に座った姿であり、［文情本］とは異なる。

【備考】

本文異同が少なくないが、「ねことも」（画帖）は、〈河〉全本に見出される。一方、「御ねことも」は、〈青〉全本（横山本・榊原家本・池田本・陽明家本・肖柏本・三條西家本）に見え、明確な本文対立が看取される。

なお、［京博本］の絵は、「ねうねうといとらうたげにな」く猫を「かき撫でて」「懐に入れてながめゐたまへり。」（新全集3巻158頁）という場面であろう。［文情本］は、東宮に女三の宮の唐猫を欲しがるようそのかした柏木が、その猫を東宮から預かることができた場面であり、物語としては、［京博本］よりも前の場面である。

第三十九帖　夕霧

［24］夕霧は小少将と対面、落葉の宮への思いを縷々と訴えるものの、返事のしようがない

［大系］4-137 139、［新大系］4-127 129、［全集］4-434 437、［新全集］4-448 451、［集成］6-60 62、［文庫］7-125 127、［評釈］8-406 411

【翻字】

れいのつま戸に／たちより給てやかて／なかめいたし給へり／里遠きをの丶篠原／分てきて我もしか／こそ聲もおしまね

【校異1】［湖月抄］下−97−8／下−100−6　○つま戸に↓つま戸のもとに　○なかめいたし↓ながめいだしてたち　○里遠き↓里とほみ

【校異2】［大成］4−1346 1348（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）○つま戸に↓つまとのもとに　○なかめいたし↓なかめいたしてたち　○里遠き＝〈別〉保坂本・国冬本↓里とほみ　※全文一致本文：なし

【図柄】

［京博本］（無記名画）にもある図柄であるが、構図が左右反転しており、その点では、「源氏物語色紙絵」（江戸時代前期、個人蔵）153に近似する。もっとも、これらの絵のうち［文情本］のみが、扇を持った夕霧の背後の邸内に、後ろ姿の女性を描く。

【備考】

詞書は、夕霧の視点からの状況説明と、本帖の情趣を端的に示す一首を撰び取ることで、絵の図柄を簡潔に表そうとしたのであろう。

詞書と対立する「つまとのもとに」本文は、〈青〉全本（横山本・池田本・肖柏本・三條西家本）に見出される。また、「なかめいたしてたち」という本文は、〈青〉全本、〈河〉全本（七毫源氏・高松宮家本・尾州家本・平瀬家本・桃園文庫本・鳳来寺本・大島本）、〈別〉御物本・陽明家本・保坂本・国冬本）にあり、〈別〉麦生本・阿里莫本も「なかめいたし給てたち」とする。「大成」諸本はすべて、動詞「立つ」をもつ本文であり、［文情本］の「なかめいたし」は独自異文である。直前に「たちより給て」とあることから、「たち給へり」の「たち」を誤って落としたか。あるいは、絵に立ち姿の夕霧が描かれることから、必要のない語として記さなかったか。ともあれ、［文情本］詞書全体の文意は通じる。

また、「里遠み」を「里遠き」とする［文情本］と同じ本文には、〈別〉保坂本・国冬本があり、ミ語法が用いられていないという点でも留意されよう。

なお、夕霧の背後に描かれる女性は、夕霧が「とりわきて召し寄」せた（新全集4巻449頁）小少将の君であろう。

第四十五帖　橋姫

［4］八の宮は経を片手にしての姫君養育、大君には琵琶、中の君に箏の琴を教える

［大系］4−301、［新大系］4−302、［全集］5−114、［新全集］5−122、［集成］6−260、［文庫］8−97、［評釈］10−40

【翻字】

池の水鳥もはね／うちかはしつゝをのか／ししさへつるこゑ／

なとを常ははかな／き事と見給ひし／かともつかひはなれぬ／をうらやましく

【校異1】［湖月抄］下―311―12　○水鳥も↕水鳥共の

【校異2】［大成］5―1510（底本：大島本　飛鳥井雅康筆）　○水鳥も↕水とりとも　○はかなき事と＝〈青〉池田本・肖柏本・三條西家本、〈別〉高松宮家本・横山家本・国冬本・麦生本・阿里莫本↕はかなきことに　※全文一致本文：なし

【図柄】

八の宮が大君、中の君に並んで邸内に座り、琴を教えている場面である。庭の池には水鳥がいるが、水面に浮かぶ二羽は、鴛鴦のつがいであろう。［京博本］にはこの場面の絵はなく、『源氏絵の世界』にも掲出されていない。

【備考】

詞書の「池の水鳥」が「つがひはなれぬをうらやましく」という情景が、池の鴛鴦として描かれる。本帖の主題のひとつであろう。ただし、［文情本］の絵では、屋敷の中で、姫君が箏の琴を演奏していることから、詞書の続きの「……ながめたまひて、君たちに御琴ども教へきこえたまふ。」（新全集5巻122頁）という内容まで描かれていると見られよう。

なお、詞書の「水鳥も」は独自異文であるが、「はかなき事と」は、青表紙本系統の他、別本にも見られる。

第四十八帖　早蕨

［2］阿闍梨から新年のあいさつと蕨など、中の君の返歌、薫の悲嘆のさま

［大系］5–12、［新大系］5–5、［全集］5–336、［新全集］5–346、［集成］7–126、［文庫］9–20、［評釈］11–25

【翻字】

てはいとあしうて／歌はわさとかましく／引はなちてそかきたる／君にとてあまたの／年はつみしかはつね／をわすれぬ初わらひ／也

【校異1】［湖月抄］下–527–1　○あまたの年は↓あまたの春を

【校異2】［大成］5–1677（底本：定家本　藤原定家筆）　○年は↓〈別〉陽明文庫本「としを」↓春を　※全文一致本文：なし

【図柄】

［京博本］（無記名画）にもある図柄であるが、構図が左右反転している。むしろ「源氏物語扇面散屏風」（室町時代後期、浄土寺蔵）178に、その類似性を認めることができるが、そこに描かれるのは庭の紅梅である。［京博本］には白梅があり、物語の場面としては梅がふさわしいが、［文情本］では桜が描かれている。

【備考】

『源氏物語』諸本はおおむね［文情本］詞書の「年」を「春」

とする。［文情本］の異文が目を引くが、かろうじて〈別〉陽明文庫本にこの本文を見出す。

なお、絵の右下方に、松に交じって描かれる花は、第五帖若紫の絵に見えるものと同じように見える。そうであれば桜であるが、それでは新年の情景を描く本帖のこの場面の季節にはそぐわないことになる。

【考察】

本稿では、［文情本］の詞書と絵との関係を、詞書は『源氏物語』諸本本文を、また絵は、江戸前期までの源氏絵を参看しながら通覧してきた。

夕霧では、詞書が二箇所から引用されているが、後半に引用された和歌一首は、この比較的長い帖の情景を端的に示すものとして欠かせなかったのであろう。そして前半は、この情景を眺める夕霧の視点や状況の説明である。

若紫・紅葉賀は、絵の図柄を具体的に説明する部分は引用せず、その帖の登場人物の視点や状況を説明する本文を採る。また、花宴・絵合・橋姫でも、それぞれ「しるしの扇」のさまや平内侍の和歌一首、池の水鳥の描写というように、その帖の内容を一部、あるいは象徴的に示す箇所を引用する。［文情本］における『源氏物語』享受のひとつのあり方が窺える。

そもそも、［文情本］の詞書は、それほど長文ではない。だがそれでも、江戸期に流布したとされる「湖月抄」本文に一致するのは、花宴・蓬生・絵合の三帖に過ぎず、「大成」を検しても［文情本］の独自異文（脱落を含む）と考えられるものは、桐壺・若紫・紅葉賀・明石・若菜下・夕霧・橋姫の七帖に見出される。これは、単なる書写の誤りというよりはむしろ、絵とともに物語を享受するという［文情本］における詞書記載のあり方、厳密な書写というよりも、『源氏物語』原文からやや離れた、要約に傾いた本文で差し支えないという意識がほの見える。これは、［文情本］のみならず、画帖という『源氏物語』享受の場においては必然的に見られる、源氏文化の広がりのひとつとして捉えるべきであろう。

また、絵については、桐壺・若紫・明石といった、物語の代表的な場面の他、紅葉賀・蓬生・絵合・初音・夕霧・早蕨でも、土佐派の図柄との共通性を指摘することができよう。とくに絵合と初音は、絵の主要な構図や人物の顔の向きが、それぞれ［京博本］［伝光則］と酷似する。

もっとも、［文情本］では、紅葉賀は光源氏と頭中将が顔を向き合わせる構図であり、夕霧でも、小少将の君を描くなど、比較的稀な図柄と見られる点も存する。

同様に、花宴における光源氏と朧月夜の君が向かい合う構図や、若菜下の柏木が、女房のいる前で膝の上に猫を抱いて座る

姿、そして橋姫の、八の宮が姫君たちに琴を教える場面と池の水鳥の描写についても、引き続き類例調査を進める必要があろう。

［文情本］の場面選択の基準、ひいては制作の目的など、今後、追究すべき課題も多い。大方のご批正、ご教導を仰ぎたい。

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二一年度）、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二二年度）、および同志社大学宮廷文化研究センター（二〇二一～二〇二五年度）における研究成果の一部である。

本稿執筆にあたり、岩坪健氏には多くのご教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。